

---

～ ありがとう ～

510

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～ありがとう～

### 【Nコード】

N5241A

### 【作者名】

510

### 【あらすじ】

今また君に会えるなら俺は「ありがとう」と言いたい。この言葉を言えなかった事に俺は後悔している…ずっと後悔している…

## ブローグ

「旭、起きな」

母親のデカイ声で目を覚ます。

「ふぁぁゝ眠いしょ…」

今は昼の12時過ぎ。仕事は夕方近い時間からなので、最近はいつもこの時間まで寝ている。まだゆっくり寝ていたいのが仕事に行かなくては行けないので、俺はしかたく仕事疲れで重たい体をゆっくり動かし、居間に向かう。

居間に行くとするでに昼ご飯が出来ており俺は眠たい目を擦りながら食べる。

さつさと昼ご飯を食べ終え会社に行く準備をする。

顔を洗い、歯を磨き、一応髪を整え、会社の作業服に着替える。そして、母親が作った弁当を鞆に入れて、車で片道40分かけて会社に向かう。これが、今の生活スタイルだ。

この生活がずっと続くと思っていた。彼女に出会う前までは…

## 第巻話：平凡な仕事な日々

「あきゝおはよゝ」

会社に出勤し仕事場に向かう途中、後ろから声をかけられた。振り返ってみるとそこには同期に入社した幸が笑顔で立っていた。

「おはようさん。幸はいつも元気やなゝ」

俺がテンション低めに挨拶すると幸は明るく、

「あきがテンション低いだけだつてゝ女の子に挨拶する時はもつと元気に挨拶しないとそんなんじゃないよ女の子にモテないよ」（余計なお世話だよ…そして何で女の子に挨拶する時元気に挨拶しなきゃいけないんだ??）と心の中で思った&amp;突っ込んだが、あえて口には出さなかった。

この子は川上幸恵幸はいつも明るく活発な子だ。髪は黒で片の位置ぐらいまである。身長は160前後ぐらいで目がクリクリしており、なかなか可愛いちよつと天然が入っている子だ。

「はゝい！分かりました。これから気を付けます」

「分かればよろしい（笑）それじゃあ仕事お互い頑張ろうねゝじゃあねゝゝあき！」

と手を振って幸は自分の仕事場に向かって行った。幸は俺の事を

「あき」

と呼んでいる。俺の本名は穴戸しつと あきひ 旭

何で

「あき」

と呼ぶのか謎だ。何で

「ら」

を付けないんだ??と初めは疑問に思ったが俺も幸恵の事を幸と呼んでいるし、まあ深くは考えなかった。

幸と挨拶を交わした後、仕事場に行き仕事を始める。仕事の内容は車のパーツを造っている。これがまた眠たくなる…何時間も同じ作

業の繰り返し…これが毎日続く。まだ入社して1カ月しか経ってないので当然といえば当然だ。ほんの2カ月前はまだ高校生で机と椅子に座って授業を受けていたのだから。俺は一日のノルマ個数を仕上げるために黙々と作業をやり続ける。

そして、長い仕事が終わる。終わるのはいつも夜中の12時過ぎ…。「やつと終わった」

これが最近の俺の口癖になっていた。

仕事が終わりに車に乗り込み、タバコを一服している時に何気なくケ―タイを見た。誰からかメールが届いていた。

「誰からだろう??」

と、思い見てみると高校の頃の友達からだった。メールの内容は「今度の休みの日に入社祝いをおかねてみんなで飯食いに行こまい。」

……このメールが全ての始まりだったのかもしれない。このダチからのメールがなかったら俺と凜花が出会う事はなかったのだから…

## 第式話：待ち合わせ

土曜日の朝の10時。俺は今、家の近くのコンビニに車で来ている。友達と飯に食いに行くためだ。

俺が住んでいる町はほとんどが山と田畑に囲まれている田舎町。なので待ち合わせをする場所はコンビニか公園ぐらいしかない。

車で友達を待っている初心者マークを付けた車が俺の横の駐車場に止まった。

「おゝす！旭あゝ久しぶりだな。」

彼の名前は浩一<sup>こういち</sup>。浩一とは中学、高校と一緒に、高校時代では色々とかバカな事をやって、一緒に停学処分まで受けたぐらいの仲だ。性格はとても面白い奴で、中々カッコイイ。そして羨ましい事に彼女持ちである。

「おゝつす！もち元気やで〜（笑）それで今日は誰が来るの？」

俺が浩一に聞くと浩一は、

「まだ旭以外は決まっていななんだよなあ〜これが。」

「マジっすか！？男2人で、飯食いに行くのはいくらなんでも悲し過ぎるっしょ！？」

「みんなに聞いたんだけど、忙しいって断られたんだよね〜」

「それじゃあゝ女でも呼びますか！？（笑）」

俺が冗談で浩一に言うと言一が、

「いいねえ〜それじゃあ適当に聞いてみますわあ〜」

そう言つと言一は誰かに電話をしたらした。

（浩一よ…お前彼女いるのにいいのか??）

と思つたが浩一はいつもこんな感じで言つても、

「問題ないっす！」

といつも答えるので、口にはださなかった。

「……それじゃあ、また後で連絡してなあ〜」

と浩一が電話を切る。

「誰に電話してたん？」

俺が浩一に聞いた。

「春樹！会社で知り合った子と一緒に来るってさ。」

浩一が嬉しそうに言った。

「ああ〜春樹さんかあ〜」

加藤 春樹。

彼女とも浩一と一緒に中学、高校と一緒にだった女友達である。性格もよく優秀。そして可愛いので、男女共から人気は高かった。高校の時はクラスは3年間とも違ったが、それなりに話しはしていたのでそれなりに仲はよかった。なので、春樹が飯と一緒に食いに行くとき浩一から聞いた時もこの時は何も思わなかった。

「そういえば、会社で知り合った子も一緒に来るって言ってたけど、どんな子なんやろうなあ〜？」

「さあな〜。ま、会ってからの楽しみって事にして、俺らは先にファミレスに行ってますか！？」

と言って浩一は車のエンジンをかける。

「そうやな。それじゃ行きますか！」俺も車のエンジンをかけ、俺達2人はひと足先にファミレスに向かった。

この時、俺は、

「春樹が会社で知り合った友達かあ〜。どっという子かな？…ま、ど

ういう子でもいいけど。俺は飯が食えればなんでもいいや。」  
と、ぐらいいか思っていなかった。しかし、その後、俺は運命的な  
出合いをする…。



## 第参話：出会い

「ああゝ腹へったゝ何食べよっかなあゝ。」

俺と浩一はひと足先にファミレスに来ている。

「やっぱり、安くて、うまくて、量が多いのっしょ！（笑）」

メニューをみながら浩一が嬉しそうに言った。

（…さすが浩一やな…。まあ、間違った考えじゃないけどな。）  
俺と浩一がメニューを見ながら何を食べよか考えている時に、春樹の声がした。

「ごめん。遅れちゃって！」

春樹が申し訳なそうに現れた。

「いいよ。俺達も今来た所やでさ！」

俺が春樹に言った。

「ありがと。あ、紹介するね 会社で知り合った、山田凜花ちゃん！」

俺はこの時ことを今でも覚えている。初めて凜花を見た時俺は彼女に見とれてしまっていた。長く伸びた黒い髪、ほっそりした顔立ち。まさに凜花は俺の好みの子だった。

「はじめまして。山田凜花です！よろしくね。」

彼女は微笑みながら俺達に挨拶した。

彼女の透き通るような可愛い声。笑うと僅かに見える八重歯。

(…ヤバイ。マジでタイプだ…。)

「どうも。俺、浩一言います。よろしく!」

と、俺が内心思っている間に先に浩一が凜花に挨拶していた。  
その後に続いて俺も挨拶した。

「は、はじめまして。穴戸旭です。」

微妙に声が裏返った…しかも噛んだ…緊張してるのバレバレやん…  
情けねえ」

「二人ともよろしくね。」

そういつて凜花はまた微笑んだ。お互いの自己紹介が終わった所で  
俺達4人は料理を注文。

ちなみに4人の席の位置は俺の右隣りが浩一。浩一の正面に春樹、  
そして俺の正面に凜花。

料理を食べながら今の心境や、仕事のグチなど色々な話を話した。  
でも俺は内心、凜花が正面だったので嬉しいドキドキと緊張のドキ  
ドキでいっぱいばいばいで何を話したのか覚えていないのが本心だ  
った。

俺は高校の時に彼女はいたがこんなドキドキは一度もなかった。  
今までに味わった事のないドキドキ感だ。

時間を忘れ話していると、既にファミレスに4時間近く俺達はいた。  
さすがにこれ以上はファミレスにいたら迷惑って事で俺達はファミ  
レスを出た。

「んで、これからどうするだ？？」

タバコを吸いながら浩一が言った。今は午後3時。さすがにまだ帰るのは早い時間帯。

「うーん…そうやなくどうしようかあ？？」

考える俺。といってもこの町は田舎町だ。行く所には限りがある。あるといったらカラオケ、ゲーセン、ボーリングぐらいだ。

「ねえ！記念に4人でプリ撮らない？？」「は？プリクラすか！？」

正直俺はプリクラが苦手…。俺が高校の時になぜか男だけでプリクラを撮るのが微妙に流行っていた。

しかし撮るとなぜかいつも同じような表情になってしまふ。だからあまり好きではない。

「いいねえーんじゃあプリ撮りに行きますかあ！？」

（…浩一よ。なんでそんな乗り気なんだ？彼女にチクるぞ？）  
なんて思ってたらしいの間にかゲーセンに到着。

そしてプリクラを撮った。やっぱり俺はいつもと同じ表情で写っていた。

（でも、凜花ちゃんと一緒にプリ撮れたから、よしとするかな）その後はゲーセンの喫茶店横でまた3時間ぐらい4人で話して、帰った。

今日は久しぶりに楽しかったと感じた一日だった。

ただ一つ心残りなのは凜花にアドを聞けなかったことぐらいだ。  
今日一日の事を振り返っているうちに俺はいつしか眠っていた。

あの時のプリクラは今も大切に持っているよ。初めて会った時の記念だからさ。

ずっとこれからも大切に持っていくよ。また君に会えるその日が来るのを願って。

#### 第四話：再び！！そして…

4人でファミレスに飯を食いに行ってから、数日が経った。

俺は、あれから特に変わったこともなく日々仕事に励んでいた。

「あきゝ仕事お疲れ」

仕事が終わわり、着替え、タイムカードを押して車に乗ろうとしたら、幸に声を掛けられた。

「おおゝ。幸もお疲れさん」

「ホント疲れたよ…（笑）ねえねえ！これからご飯食べに行かない??？」

「いいけど、誰と食いに行くんだ??」

俺はタバコに火を付けながら幸に聞いた。

「それは秘密！行つてからの楽しみつてことで。」

「?…まあいいか。」

というわけで、幸の車に案内されながら俺はレストランに向かった。

「…ここは…」

付いたレストランは前、俺と浩一と春樹と凜花で飯を食ったファミレスだった。。。

「どうかしたの??」

幸が首を傾げながら聞いた。

「いや…別になんでもない」

隠す必要はなかったがとつさの反応(?)で言わなかった。

「?。それじゃはいろつか!」

幸の話によると、もう一緒に食べる子はファミレスに来ているらしい。

レストランに入り、幸の後ろに付いていく。

「おまたせえ〜。」

どうやら、幸の言っていた友達の席に付いたらしい。

しかし、俺は席に座っていた2人の女子の内の一人に見覚えがあった。。。

「あれえ??旭君!!」

「あ…。どうもです。」

そこに座っていたのはまぎれもなく凜花だった。

「あれえ??2人とも知り合い??」

幸が興味津々に聞いてきた。。。

「ああ…ちよつとね…」

「なにそれえ??」

「2人だけの秘密かな（笑）」

凜花ちゃんが笑いながら言った。

（やっぱ可愛いなあ）

とか思っていた。

「ていうか私は放置ですか??」

凜花の隣に座っていた子が冗談半分で言った。

「ごめん!!紹介するね。私の親友の前田綾ちゃん」

「はじめて。前田綾です。」

前田綾。メガネを掛けていて髪はパーマをかけている。

見た目はとても『優等生』って感じの子ってのが前田綾の第一印象だった。

「どうもです!穴戸 旭っす!」

…とまあ挨拶は軽く終わらせ俺達は飯を食った。

しかし、男は俺1人、他3人女って言うのは正直緊張もんだ。

しかも、3人とも美人だ。（まあ、幸は美人かは謎だが（笑））

その後は、また前と一緒に3時間ぐらいファミレスで話をしていた。話の中で俺は、

「……ていうか幸と凜花さんはどこで知り合ったの??」

俺が一番気になっていたことを聞いた。

「それは、秘密!! (笑)」

3人は笑いながら言った。

(かなり気になるんですけど…)

ホントに何処で知り合ったのか謎だ。

幸と凜花さんは住んでいるところも、中学も高校も違う。

まったくといって接点がない。

しかしながら女の子はスゴイと感じる。どこに知り合いがいるのか分からない。

まったく恐ろしい限りだ。

そして、ファミレスを出て帰るとき、

「ねえ。旭くん??メアド教えてよ!」

凜花に言われた。俺が聞こうと思っていたのに向こうから聞いてくるなんて、

俺は一瞬フリーズしたが、平然を装い、

「いいよ!!交換しよまい!」

そして、交換!! (やったあ!!!!!!) (心のなかで叫んだ。

その後に綾さんとも交換。

めっちゃ嬉しかった。



「それじゃあまたね!!」

別れの挨拶をして俺は家に帰った。

家に帰って、携帯を見てみる。メールが2通届いていた。

1通目は綾さん。

「今日はありがとね。」（以下省略）「簡単言えば食事のお礼。

綾さんには悪いが簡単にメール送って、2通目を見てみる。と、凜花だった。

「凜花です。この前と今日はありがとうございました。旭君と話せて楽しかったです。（笑）」

また暇な時にメールして下さい。それではお休みなさい。」

みたいな感じのメールだった。俺は一人部屋で「よっしゃあゝ!!」と叫んでいた。

その後は、凜花とメールをしている間にまたいつの間にか眠ってしまっていた。。。。

――君からの初めてのメールは今も残っていないよ。

君とは数え切れないほどのメールをしたね。

君があんな事になるなら君とのやり取りのメールを残しておけば良かったと今後悔しているよ。あの時初めて君からメールが来た時ホントに嬉しかったよ。

君は僕のメールを見てどう思った???どう感じた???教えてくれ……。。。



## 第伍話：コンビニ店員

凜花からメールが来た日（正確には飯を食いに行った日）から俺は毎日の用にメールをしている。

内容はいつも下らない話し。会社の話しや、身近で起こった事など色々メールをしている。

毎日が平凡でつまらなかった俺にとって凜花とのメールはとても楽しかった。

次第に俺は凜花を好きになっていった。

就職して1ヶ月が経った。俺は仕事に大分慣れてきた。初めは中々上手くいがなく、主任によく怒られていたが最近は逆に色々とアドバイスをしてくれる。  
今日も一日を終えた。

「お疲れ様…」

暗い声で言ってきたのは俺と同期に入社した、古島吉城。こいつを一言でいうと

「地味」

だ。よく学校のクラスにいる、根暗系だ。

「ああ…お疲れ」

俺はあまり吉城と関わりたくないからいつも適当に返事をする。

そして、吉城は仕事をやりだす。俺が働いている所は2勤交代制だ。その後俺はそそくさと会社を出る。

車に乗り、エンジンをかける前にメールが来ていないかチェックす

る。もちろん凜花からのメールをだ。しかし、メールは来ていない。今は午後4時過ぎ。

「まだ仕事中かあ」

溜め息をつきながら独り言を……。

最近はいつもこんな感じに凜花からのメールを待っている。寝る事よりも仕事をする事よりも、ダチと遊ぶ事よりも凜花とメールをしている事が今の俺には1番だった。一応をセンターにも問い合わせをするが当然の事ながらメールは来ていなかった。

「ま、しょうがないかあ」

と自分に言い聞かせ俺は車のエンジンをかける。

「あーそついやあタバコないなあ。コンビニにでも寄るかなあ」

何気なく俺は帰り道のコンビニに寄る。

「あ……い、いらっしやいませ」

高校生バイトの店員さんが挨拶。しかも何故か微妙な囁み。まあ古城みたいに暗く挨拶されるよりマシかな。そんな事を考えながら俺はパンとジュースを選んで持ってレジへ。

「セツタのソフトパック」

店員さんに俺は普通に言う。（ホントは未成年やからダメなんだけどね）

「は、はい。ご、合計780円になります。」

（普通に売ってくれたし。ラッキー！そして、何故か知らないけど、さつきからめっさ噛んでいるんですけど。新人さんか？）

俺は小銭がなかったから1000円札を出した。そして、お釣りを貰う時に、

「あ、あの…し、穴戸先輩ですよね??」

「え?」

いきなり店員の女の子に名前を呼ばれたから俺はビックリした。

「わ、私、先輩と同じ高校で2年の鈴木友香です。」

「……」

…思いだし中（ - ” - ）

（こんな子いったけなあゝ。うゝん…いたような気がしなくもないけどな…）

俺が頑張っと思いだしていると、

「わ、分からなくて当然ですよね。一度も話した事ないですから。」

彼女は寂しい顔をして言った。

「ごめんなあゝ」

「ぜ、全然いいですよ。気にしないで下さい。」

…そんな事言われて気にします。

俺は人の顔や名前を覚えるのが苦手なのだ。高校時代は後輩の名前はほとんど知らない。知っているのはほんの一握りなのだ。

「ホンマ、ゴメンな！！それじゃバイト頑張つてな。」

俺の後ろに他の客が迷惑そうな顔で待っていたのに気付いたので俺は逃げるようにコンビニを出た。。。

「あ、ありがとうございました。」

彼女は最後まで囁んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5241a/>

---

～ありがとう～

2010年10月10日04時39分発行